

## 第33回非開削技術研究発表会に参加して



山中 初

YAMANAKA Hajime

アイレック技建(株)  
非開削推進事業本部  
営業部担当課長

「第33回非開削技術研究発表会」が、11月22日に港区の品川シーズンテラスカンファレンスで開催されました。私は今回初めて参加し、このような執筆の機会をいただきましたので、その時の模様を簡単ではありますがお伝えしたいと思います。

本年度の発表会も、前年度に引き続き新型コロナウイルス感染防止対策として、Webを併用した形式で開催されました。参加人数は、会場参加が53名、Web参加が32名の合計85名でした。会場出入口付近には各種工法のパネルが展示され、休憩時間等にご覧になっている方もいました。

今回の発表会は「防災」「非開削技術（応用）」「地中掘削（事例）」「調査・修繕」の4つのセッション、合計14件の発表が行われました。

（一社）日本非開削技術協会（以下、JSTT）の森田会長の開会挨拶により始まりました。挨拶のなかで「大学の教員という立場でもあり、就職活動の際に仕事の話をする。よくゼネコンは『地図に残る仕事』というが、残念ながら非開削技術を用いた地下埋設物は地図に残らない。しかし、発掘等により400年も前の地下施設が発見された例もある。このことから、非開削技術は『地図に残る仕事』ではなく『歴史に残る仕事』だと言っている」という趣旨のお話がありました。私も地下埋

設物に関する仕事に携わっていることから、現在の業務が歴史に残ればと、とても心に残る言葉でした。

発表内容は、セッションのテーマ毎に施工事例や施工時の苦勞した点、新しい技術開発や取り組み、工法の研究など多岐にわたり、貴重な発表を聞くことができました。

「防災」は今回初のセッションであり、近年問題視されている集中豪雨による地滑り対策、地震による液状化、マンホール浮き上がり対策の事例紹介があり、災害対策の重要性の再認識ができました。

「非開削技術（応用）」ではAIを活用した地中探査・既設管路内の錆のレベルによるクラス分類の事例紹介がありました。今回は調査に関する発表でしたが、地中掘削にもAIが応用できるかと大変興味深い技術でした。

「地中掘削（事例）」では鋼矢板を切削した事例、難易度の高い互層推進の事例と、我がアイレック技建より鋼管の長距離推進の事例が発表されました。私が携わっている推進工法エースモールの技術も更に向上していく必要があると感じました。

「調査・修繕」では調査から管渠の更生、更新など身近で問題となっている事柄についての発表があり、開発に懸ける使命感や熱い想いを感じました。

閉会にあたり、JSTTの森技術委員長より、発表の総括と非開削技術のさらなる発展に向けた挨拶、関係スタッフへの感謝の御言葉があり、盛況のうちに発表会は終了しました。

今回も前回同様、新型コロナウイルスの影響で意見交換会の開催はありませんでしたので、閉会後は参加した同僚らと共に少人数で品川駅付近の路地裏にて発表における反省会、意見交換会を行いました。

コロナ禍により、このような発表会への会場参加は難しいですが、今後の業務に参考となる大変勉強になる発表会でした。



会場の様子